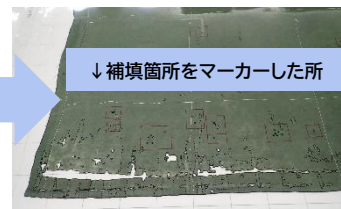
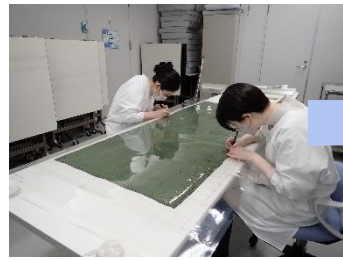
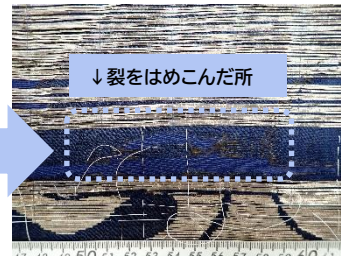


12. 修理



欠損箇所に補填する布を検討するため、裂の上に透明フィルムを置いて「損傷地図」を作りました。



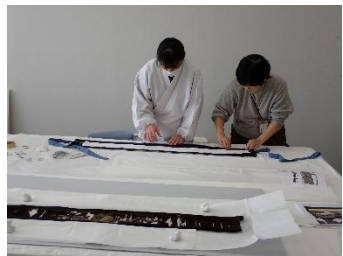
生地欠損箇所が大きい場合(写真左)は、欠損箇所と同じ形に裁断した裂をはめこみました(写真右)。



銀糸を整えた上からクレペリン(絹のヴェール)をかぶせました。薄絹をかぶせることで、銀糸の乱れや脱落を防ぐことができます。

13. 仕立て

各修理裂の修理が終わった後、元の姿に仕立て直しました。縫うことで生地に新たな針目ができないよう、元の針目をたどって縫い合わせました。



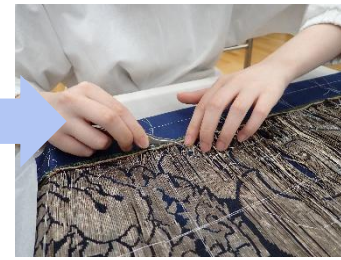
復元新調する刺繍帯の打合せのようす



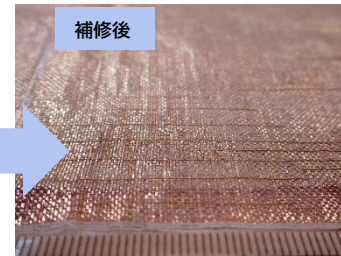
縫製の途中に、衣桁にかけて生地釣合いを確認する。



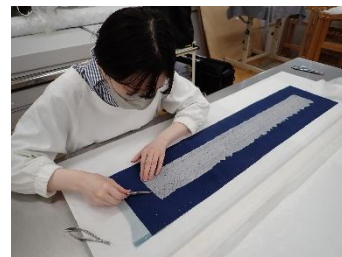
帽子を頭に固定するための紐に強度を持たせるため、帽子を解体した際に固定用の紐を取り付けた。



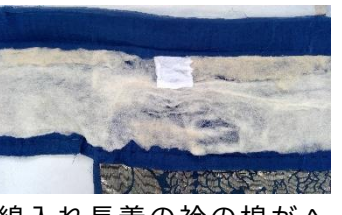
腰巻の銀欄の平銀糸の乱れ(写真左)は、平銀糸を1本ずつピンセットで戻していききました(写真右)。



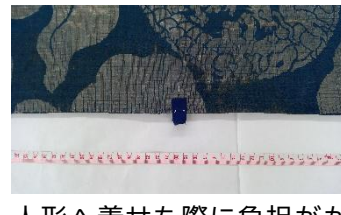
前掛けは経糸の欠損によりキレが生じていた(写真左)ため、経糸に対して平行に糸を長く渡し、横糸を小さく留めていききました(写真右)。



裂の修理は、薄絹を張った「台張り」に固定して行います。この薄絹は裂の修理完了後にピンセットで1本1本の繊維を抜いて外します。



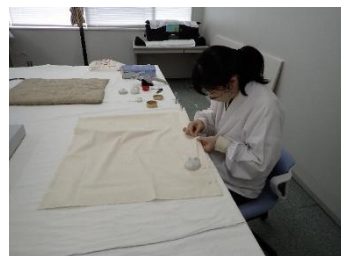
綿入れ長着の衿の綿がへたっていたので綿を追加した。



人形へ着せた際に負担がかかる箇所に力布を追加した。



肉布団にあいていた穴は綿布でカバーし、周囲を留めた。肉布団保護用の袋を綿布で作し、肉布団を入れた。



「八戸三社大祭の山車行事」山車人形衣装修理事業

本報告では「衣裳」の字を使用していますが、国庫補助事業では「衣装」の字を使用しています。

「太公望」人形衣裳修理報告



重要無形民俗文化財「八戸三社大祭の山車行事」は、八戸市内のおがみ神社、長者山新羅神社、神明宮の合同例祭に合わせて、8月1日から3日に行われる行事で、三社の神幸行列に従い、多彩な民俗芸能と27台の華やかな風流山車が市内を巡行します。

このうち、おがみ神社の行列には、八戸市の有形民俗文化財である「武田信玄」と「太公望」の2体の山車人形が1年交代で曳き出されています。この2体の山車人形は、江戸時代後期頃のもので、かつては八戸藩の有力商人である河内屋が「武田信玄」を、八戸三店の1つ近江屋が「太公望」をそれぞれ所有していましたが、後の時代になり、おがみ神社へ2体とも寄進されました。

「八戸三社大祭の山車行事」の重要無形民俗文化財指定に向けた行事調査の中で、おがみ神社所蔵となっていた2体の山車人形についても調査が行われ、江戸時代の祭礼の姿や八戸藩の有力商人の祭りへのかかわりなどを示すものとして貴重であることから、平成15年7月29日に「武田信玄と屋台一式(人形、屋台、飾り幕)」「太公望と屋台一式(人形、屋台、飾り幕)」の2体が市指定文化財となりました。

この2体の山車人形の衣裳については、劣化が激しく、生地断裂も起こっている状況でした。染織分野の専門家による調査(平成28年度実施)の結果、これ以上の行事への曳き出しは、さらに衣裳を傷めてしまうことから、国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金(文化庁)を活用し、「重要無形民俗文化財八戸三社大祭の山車行事民俗文化財伝承・活用事業」として、行事の用具修理の観点から令和元年度より山車人形衣裳修理を行っています。

■事業概要

事業者:八戸三社大祭山車祭り行事保存会

事業期間:令和4年4月1日～令和7年3月31日

修理期間:令和4年6月1日

～令和5年3月31日【第Ⅰ期】

令和5年4月1日

～令和6年3月31日【第Ⅱ期】

令和6年4月1日

～令和7年3月31日【第Ⅲ期】

修理対象:太公望人形衣裳一式

修理方針:文化財としての価値を保ちつつ、今後の行事の使用に耐えられるよう修理する。

修理担当:学校法人女子美術大学染織文化資源研究所

事業指導:文化庁、青森県教育委員会、

八戸市教育委員会(社会教育課)

総事業費:12,019,120円

内訳)修理経費 11,612,672円

事務経費 406,448円

■今後の予定

修理完了した「太公望」人形衣裳は、人形に着せた状態で令和7年の八戸三社大祭へ曳き出し予定です。なお、今回修理した衣裳は行事へ曳き出す時のみ人形へ着せ、平時は中性紙箱に収納して空調管理のできる屋内で保管することとし、資料の保全をはかります。

本報告は「八戸三社大祭の山車行事人形衣裳修理業務報告書 太公望人形衣裳」女子美術大学染織文化資源研究所(令和7年3月)をもとに作成しました。

本件担当

八戸市教育委員会 社会教育課 文化財グループ

電話:0178-43-2111(代表)

メール:shakyo@city.hachinohe.lg.jp

■「太公望」人形衣裳修理の様子

1. 梱包・集荷



衣裳を1点ずつ密閉式の袋へ収納した後、美術専門車で女子美術大学(相模原市)へ運搬しました。袋の中には脱酸素剤も入れて、約1か月間脱酸処理を行いました。

3. 修理前撮影



記録のため、修理前に撮影をしました。

4. 採寸



各衣裳の寸法や重さを計測しました。

2. クリーニング



保護ネットの上からミュージアムクリーナーで虫の死がいやホコリなどの汚れを取り除きました。

修理に取りかかる前に、
脱酸処理→クリーニングを行い、
現状の記録をとります。

5. 素材調査



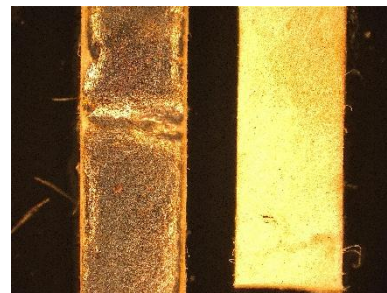
デジタルマイクロスコープによる調査



飾り布の刺繍部分

修理に必要な材料の素材を準備するため、デジタルマイクロスコープやブラックライトを使用して衣裳の素材を調査しました。
※右の写真では蛍光反応が見られ、天然染料の使用が分かりました。

6. 材料分析



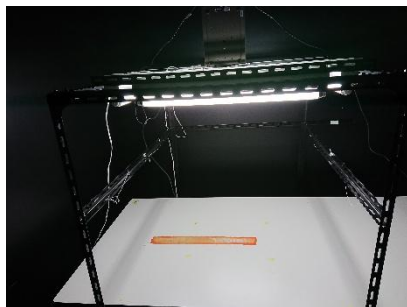
金属糸(上着)

衣裳からとれてしまった糸などは、電子顕微鏡の分析装置を使って詳しく調査をしました。

その結果、上着の生地を使用されている金色に見えた金属糸は、Ag(銀)が検出され、「銀糸」であることが分かりました。

刺繍帯の刺繍部分の金属糸も金色に見えていましたが、分析の結果、こちらも「銀糸」であることが分かりました。分析をすることで、使用する材料を見ただ目に惑わされずに正しく選ぶことができます。

7. 染料分析



分光測色(帽子)

繊維素材や染料の特定のため、2D放射輝度測定機を使って分析を行いました。これは、染料によって光の反射の特性が異なる点を利用して染料を推定する方法で、文化財における非破壊検査法のひとつとして近年需要が高まってきているものです。

8. 解体

衣裳を裂(パーツ)ごとに解体しました。解体したことで、本来の生地の色が明らかになりました。



帽子や飾り布に使用されている生地は、経年劣化によって本来の生地の色が褪色していました。

解体すると内側に折り込んでいた縁の部分が見え、制作された当時の生地の色を確認できました。

分析の結果、天然染料で染められたものだとわかりました。



生地の縁に、鮮やかな紅色が現存



生地の縁に、濃い紫色が現存



生地の縁に、薄い藍色が現存



ブラックライトをあてると、紅に反応した

9. 解体したパーツごとの計測と生地両面の撮影、重量の計測

10. 加湿整形、洗浄



表地の加湿整形(腰巻)



ホコリの吸引(飾り布)



まんべんなく泡をつけて汚れを浮かす(袴)

経年劣化により衣裳生地の布目の経糸と緯糸のゆがみが生じていたため、グリッド線を記入した透明フィルムの上に置き、透湿防水効果フィルムをかぶせ、固くしぼったタオルを置いて加湿した後、アクリル板と重石を置いて形を整えました。

細かいホコリは、専用の装置で吸引して取り除きました。綿入れ長着と袴は汚れがあったため、色落ちしないか確認した後、中性洗剤(Oves)を使用し、海綿でやさしく押すようにして洗いました。

11. 修復準備(補修裂・糸・仕立て用糸の準備、台張りの準備)



布の染色



上着修理用のクレペリン(染色後)

素材調査の結果をもとに、補修裂や糸、仕立て用の糸を用意しました。

刺繍帯は破損が激しかったため、復元新調(オリジナルと同様に新たに制作すること)しました。オリジナルに近づけるため、使用する糸は類似のものをを選び、金糸の太さも合わせました。

このように、見た目では判別できない素材を分析することで、**制作当時の材質の特定**や**年代の推定**ができます。

このように、時間をかけてたくさんの準備をしてから修理の工程に入ります。